

ルーマニア北西部における伝統的生活文化観光の現状と課題 - 観光対象へのアクセシビリティとオーセンティシティ -

著者	宮本 佳範, 大塚 奈美
雑誌名	東邦学誌
巻	41
号	1
ページ	29-45
発行年	2012-06-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1532/00000258/

ルーマニア北西部における
伝統的生活文化観光の現状と課題

—観光対象へのアクセシビリティとオーセンティシティ—

宮 本 佳 範
大 塚 奈 美

愛知東邦大学

ルーマニア北西部における 伝統的生活文化観光の現状と課題

ー観光対象へのアクセシビリティとオーセンティシティー

宮 本 佳 範
大 塚 奈 美

目 次

1. 研究目的
2. 本研究の視点
 - (1) オーセンティシティに関する研究の流れ
 - (2) 本研究の視点
 - (3) なぜルーマニア北西部か
3. 伝統文化の現状
 - (1) 対象地域の概要
 - (2) クルージ・ナボカ周辺とマラムレシュに残る伝統文化
4. アクセシビリティと個人旅行者の印象
 - (1) 観光者は何を期待して訪れるのか
 - (2) 観光対象へのアクセシビリティ
 - (3) 個人旅行者の印象
5. 考察
6. おわりに

1. 研究目的

ある地域の人々にとっては日常生活の一部である光景であっても、他の地域の人々にとって珍しければそれは観光対象となる。世界遺産に登録された岐阜県白川郷の合掌造り集落や、華やかな民族衣装を身にまとった人々が生活している中国雲南省山岳地帯の村々などはその典型的な例といえよう。それらの地域には、既に多くの観光客が訪れるようになり“観光化”が進んでいる地域もある。

観光振興は地域の活性化、経済的利益の拡大そして伝統文化の保存や住民の地域アイデンティティ高揚といったプラスの効果が期待されるものである。しかし、“観光化”というあまりよい響きを感じないだろう。観光化すると観光客向けの施設が多く作られ、お土産物屋が軒を連ね、伝統的な民芸品は観光客の好みに合わせて作られるようになる。そして、特別な祭日等に行われていた伝統芸能なども観光客向けに週末毎にステージで演じられるようになる。このように伝統

文化がお金目当てのパフォーマンス化していく、といったイメージを持つのではないだろうか。こういった状況が「マイナスのイメージ」として捉えられるのは、観光化のメリット以上に、伝統文化がオーセンティシティ（真正性）を喪失し、商品化していくことに対する失望感のようなものがあるからではないだろうか。

伝統文化のなかでも日常生活と密接に関わる文化（以下「伝統的生活文化」という。）は、日常生活の一部であるからこそ、日々の利便性や快適性などと直結する近代化の波にのみ込まれ、消滅しやすいものであろう。それはTシャツを着る文化が世界中に拡大したことや日本人の生活スタイルの変化を考えればわかりやすい。一方、近代化が進んだ国の人々にとっては伝統的生活文化を残す地域が逆に魅力的に映る場合がある。それが、単なるノスタルジーなのか、異文化への興味なのかはともかくとして、世界各地で前近代的な伝統的生活文化を対象とした観光が行われている。しかし、観光者が多く訪れるようになると先ほど述べたように伝統文化の商品化につながる可能性がある。観光者は自らが観光に行くことにより、マイナスの意味で観光化した観光地を作り出してしまふことに加担しているとさえいえるだろう。

大橋（1998）は「文化の真正性と商品化は、エスニック・ツーリズムにおいて観光対象化される少数民族や先住民の文化をめぐる重要な課題である」と述べている。伝統的生活文化を対象とした観光は、多くの場合エスニック・ツーリズムの範疇で捉えられ、また仮に「エスニック」といえない場合であっても問題点はある程度共通するものである。したがって、伝統的生活文化を対象とした観光の場合も文化のオーセンティシティと商品化は重要な問題となる。また、持続可能な観光が目指されるようになった現在、オーセンティシティのある伝統的生活文化の保護につながるような観光をいかに実現させるか、考えていく必要がある。そのためには世界各地で行われている伝統的生活文化を対象とした観光の現状を把握し、問題点を明らかにしていく地道な研究を積み重ねていくことが必要であろう。こういった問題意識から、本研究はルーマニア北西部で行われている伝統的生活文化を対象とした観光の現状と問題点を明らかにすることを目的とする。

2. 本研究の視点

(1) オーセンティシティに関する研究の流れ

観光化に伴う伝統文化の商品化や形骸化など、“本物の文化”が毀損されることについては、Greenwood（1977）をはじめ多くの研究者の間で問題視されてきた。一方で、そもそも“本物の文化”とは何か、観光場面に“本物の文化”が存在するのか、といった議論も展開されている。こういった観光対象となる文化のオーセンティシティ（真正性）に関わる問題は、社会学や文化人類学、地理学などの分野で研究されてきた。

オーセンティシティに関する研究の先駆けともいえるのがBoorstin（1962）の「擬似イベント」論である。彼は近代観光を「擬似イベント」の一つとして捉え、観光の虚構性を強調した。そして、バリの文化がいかに観光客向けに演出されたものであるかを明らかにした山下（2000）

や、中国のエスニック・ツーリズムにおける観光者向けの演出に関する曾（1998）の研究のように、各地で観光者に提供されている伝統文化が実は観光用に作られたものであるという実証研究が数多く発表されている。また、多くの伝統は近代に意図的に創られたものであるとする「伝統の創造」という視点（Hobsbawm 1983）や文化を意図的に操作可能な対象として捉える「文化の客体化」（太田 1993）など、文化の動態性を強調する理論も一定の評価を得ている。構築主義的な視点もその一つといえよう。遠藤（2002）は「構築主義的立場からすれば、観光のオーセンティシティとは何か、それは擬似的なものどどのように異なるのか、そして両者の対立はいかにして乗り越えられるのかといったことは重要ではない」とし、その理由を「オーセンティックなものとオーセンティックでないものという語彙にとらわれてしまうと、その両方が実は創られているのだということを適切に認識できなくなってしまう」と述べている。また、本物と偽物（複製）の区別自体を問いなおすポストモダンの視点からも、観光場面における文化のオーセンティシティについて問うことの意味そのものが疑問視されている。

このようにオーセンティシティの有無より文化の動態性を強調する理論が台頭したことについて、中村（2009）は一定の評価をしつつも、オーセンティシティに関する議論の余地をなくしてしまい、「真偽」を問うこと自体「時代遅れ」とみなされてしまうと疑問視している。パッケージツアーの団体旅行者に対して呈示される伝統文化を見る限り、本物とも偽物ともいえない独自の「観光文化」だとする捉え方やポストモダンの視点は、観光場面の現状を的確に表しているだろう。しかし、「現状」の説明としての的確であったとしても、今後どうあるべきかを示すものではない。現在目指されている持続可能な観光（サステイナブル・ツーリズム）について世界観光機関（UNWTO）は、ホストコミュニティの社会文化的真正性を尊重すべきであることや、伝統的な価値観を守ることが必要であると述べている（UNWTO 2004）。現状の分析にとどまらず、観光のこれからのあるべき姿を考えるためには、持続可能な観光という考え方に基づき、観光対象となる伝統文化のオーセンティシティについて再考していく必要があると考える。

（2）本研究の視点

本研究は、オーセンティシティのある伝統的生活文化の保護を重視しつつも、外部からの影響を遮断した博物館的保護ではなく、あくまで観光利用との両立に向けた課題を検討することを目的としている。文化の保護だけでなく観光地として成立していくためには観光者の期待にいかに対応していくかが観光地の課題となる。そして、その観光者の期待がどのようなものが、観光対象となる文化のオーセンティシティを保つためにはポイントとなる。

しかし、観光者が観光対象となる伝統文化にオーセンティシティを求めているかについては意見が分かれている。Boorstin（1962）は、観光者はそもそもオーセンティシティを求めているという立場から近代観光を論じている。Bruner（2005）は「オーセンティシティは観光研究の文献では問題かもしれないが、自分たちには重要な問題ではない」という観光者の言葉を紹介し、橋本（2007）もまた、観光者は「真正性」の有無に関係なく、ただ「よく知られたもの」を求

めているのである。」と述べている。逆にMacCannell（1976）は、観光地で呈示されている文化に実際にオーセンティシティがあるかはともかく、観光者はオーセンティシティを求めているという立場である。そしてCohen（1979）は、BoorstinやMacCannellの議論を踏まえたうえで観光者の求める経験の多様性を強調し、観光経験を「気晴らしモード」「レクリエーション・モード」「経験モード」「体験モード」「実存モード」の5種類に分けている。簡単にいえば、リゾートでのんびりパッケージを楽しむタイプが「気晴らしモード」、旅行業者が企画したパッケージツアーに参加して観光地を見て回るタイプが「レクリエーション・モード」、バックパッカータイプの旅行者が「経験モード」や「体験モード」、巡礼者タイプが「実存モード」に該当する。そして、「気晴らしモード」から「実存モード」に移行するにしたがって観光者はオーセンティシティを求めるようになるという。

Cohen（1979）の視点は、観光者の期待に応える形で観光地側が文化呈示をすることに着目する本研究にとっては非常に重要である。それは観光地側が主たる観光者としてどのようなタイプを想定するかによって、呈示しようとする文化の質が変わってくると考えられるからである。伝統的生活文化を対象とした観光に限定した本研究の場合には必ずしもこの5種類を明確に区別する必要はないだろう。ただし、大きく「気晴らしモード」「レクリエーション・モード」に該当するタイプの旅行者（旅行業者が企画・運営するツアーに参加する団体旅行者）と、「経験モード」「体験モード」場合によっては「実存モード」に該当するタイプの旅行者（バックパッカータイプの個人旅行者）の場合を区別することは意義あるものとする。そこで本研究では観光者の視点から論じる際には、団体旅行者の場合と個人旅行者の場合を区別するようにした。

また、本研究では観光地の特性を知るための一つの指標として、観光対象へのアクセシビリティに注目した。ここでいう観光対象へのアクセシビリティとは、観光者が見たい（体験したい）と思う観光対象へのアクセスしやすさのことである。観光対象へのアクセシビリティは地理的な側面だけでなく、情報の入手しやすさ、観光対象（有形・無形を含む）の観光者への開示状況等も含むものである。また、観光対象へのアクセシビリティは団体旅行者の場合と個人旅行者の場合でも異なるものである。両者のアクセシビリティの違いを知ることは、その観光地がどのようなタイプの観光者を想定しているのかを知る一つの手掛かりになる。それは、団体旅行者と個人旅行者ではオーセンティシティに対する期待が異なることと、観光地として成立していくためには観光者の期待に応じていく必要があることを踏まえると、オーセンティシティのある伝統文化の保護と観光との両立を考える上で重要なポイントとなる。

（3）なぜルーマニア北西部か

本研究では、ルーマニア北西部、クルージュ・ナポカ周辺およびマラムレシュの事例を調べることとした。共に中世ヨーロッパのような古き良き伝統的生活文化が残る地域として知られている。旧東欧の国々では、度重なる国境の変更の際に近隣国に残された人々がその国のなかで少数民族となっている現状がある。ルーマニアにおいても「トランシルヴァニアのハンガリー人問題」

(萩原 1993) といわれるように、トランシルヴァニア（本研究の対象地を含む地域）には多くのハンガリー人が少数民族という立場で暮らしている。そして、少数民族となった人々は自らのエスニック・アイデンティティを強化するためにも積極的に伝統文化を守ることが必要であったことも指摘されているように（例えば、加賀美 2003）、トランシルヴァニアに住むハンガリー人も特に色濃い伝統を保っているといわれている（みや 2010）。トランシルヴァニアのなかでもクルージ・ナポカ周辺（特にクルージ・ナポカから西に広がるナーダシュ川流域）にはハンガリー系の村が多い。また、マラムレシュはウクライナとの国境付近かつ山に囲まれた地域である。それもあり、長らく近代化の影響を受けず、「今日この地を「ヨーロッパでは稀有な辺境の地域」とか「フォークロアの宝庫」と民族学者がいうところの地となっている」（小谷 2011）のである。このように、クルージ・ナポカ周辺やマラムレシュは伝統的生活文化が残っている地域として期待できる場所である（具体的には「3. 伝統文化の現状」を参照）。

ただし、本研究は人類学的な視点で文化そのものを研究しようというものではなく、観光の視点から研究するものである。したがって、いくら伝統的生活文化が残っていても、観光者がまったく訪れないような地域は本研究の対象とはなり得ない。トランシルヴァニアは観光ガイドブック等でも紹介されている地域であり、ある程度観光者も訪れ、その地域としても観光者が訪れることを意識しているものと推察される。以上の理由により、本研究ではクルージ・ナポカ周辺およびマラムレシュの事例を取り上げることにしたのである。

3. 伝統文化の現状

(1) 対象地域の概要

クルージ・ナポカは、トランシルヴァニアの中心的都市である。現在のルーマニアの北西部に位置するトランシルヴァニアの歴史については諸説あり、それぞれの立場によって主張も異なるため、ここでは詳述を避けるが、Kósa (1977) によれば、2～3世紀にはローマ帝国のダキア州の一部で、ハンガリー人は10世紀ごろまでに定住、12～13世紀にはドイツ（ザクセン）人の移住が進められ、ルーマニア人も12～13世紀までにはトランシルヴァニアの山地に住んでいたとされる。トランシルヴァニアは中世にはハンガリー王国の一地域であったが、独立侯国、オーストリア帝国による統治、ハンガリーへの返還などを経て、第一次世界大戦後のトリアノン条約でハンガリーから分離され、ルーマニア領となった。その後一時期ハンガリーに一部が復帰するが、第二次世界大戦後のパリ条約によって再度ルーマニア領となり、現在に至る（同）。トランシルヴァニアは、その歴史的背景からルーマニア人、ハンガリー人、ザクセン人、ロマなどが混在する地域となっている。

マラムレシュは、ルーマニア中西部の北端に位置し、住民の大多数はルーマニア人で、少数民族としてハンガリー人やウクライナ人も一定数いる。歴史的なマラムレシュは現在のルーマニアの他、ウクライナにも及ぶ地域であるが、本研究では現在のルーマニア側のマラムレシュを対象とする。

(2) クルージ・ナポカ周辺とマラムレシュに残る伝統文化

①クルージ・ナポカ周辺の場合

クルージ・ナポカ周辺のカロタセグ地方（Kalotaszeg—ルーマニア名：カラタ地方zona Călata）やメゼーシェーグ地方（Mezőség—ルーマニア名：クンピア・トランシルヴァニエイ地方Câmpia Transilvaniei）は、ハンガリー系の村が多く、ハンガリーの古い伝統が残る地域としても知られる。筆者は1990年代後半よりクルージ・ナポカ周辺の地方に通い、特にカロタセグ地方に関しては、2006年以降、長期間の滞在も経験し、伝統的生活文化に触れてきた。

クルージ・ナポカの北東にあるセーク（Szék—ルーマニア名：シクSic）はハンガリー系の村で、住民が日常的に民族衣装を着ることも知られる。近年の若い世代では普段の生活では既成の洋服が主流となっているが、年配の女性では、セークの民族衣装以外の洋服を着たことがないという人も珍しくなく、セークのなかだけでなく、クルージ・ナポカやハンガリーでもセーク出身の年配女性は一目でわかる。日曜には、民族衣装を着た人々が教会に集まる。他の地域のハンガリー人と同様に、家の一室を民芸家具や民族衣装で調える習慣があり、「セークの部屋（széki szoba）」などと呼ばれる。機織り機のある家もあり、機織りや刺繍などの伝統的な手仕事をする人もいる。



写真1 民族衣装（撮影：大塚）

クルージ・ナポカの北西のカロタセグ地方の伝統文化は豊かなものであるが、なかでも、ナーダシュ川流域のハンガリー人のものは特に華やかである。カロタセグ地方のハレの民族衣装は、ハンガリー人の民族衣装のなかでももっともきらびやかなもののうちのひとつで、ビーズをふんだんに用いた独特の刺繍は他にはないものである（写真1）。年配の女性は普段も民族衣装に準じた服装をしている。装飾がない、または控えめの普段着仕様の民族衣装を着用し、ブラウスやセーターなどは既製品を用いる場合も多い。日曜の礼拝には民族衣装を着用する人もいるが、既成の洋服を着る人の割合もかなり高い。民族衣装の晴れ着を着る人が多い機会としては、クリスマス・復活祭など重要な祝日や堅信礼・婚礼などの通過儀礼が主要なもので、主に教会に行くとき

に着用する。このような機会には、民族衣装を着用するだけでなく、踊りや音楽、その他各行事に関連した様々な伝統的習慣が実践される。また、生活文化とは離れるが、近年催されることの多い各種フェスティバルなどでは、しばしば民族衣装を着てのパレードや、民俗舞踊・その他伝統的文化の実演が行われる。カロタセグ地方では刺繍や彩色家具なども村の人にとって重要なもので、素晴らしい装飾部屋（cifraszoba）のある家が少なくない。彫刻を施した独特の家や門、



写真2 村の様子（撮影：大塚）

教会の天井画などにも伝統文化が表れている。刺繍や縫い物は本来は農閑期の仕事ではあるが、気候の良い時期には女性たちは通りに面した軒先や門の脇などに腰かけて刺繍をしたりおしゃべりをしたりする。

また、クルージ・ナポカ周辺だけでなく、農村地方全体に共通することであるが、家畜の飼育や馬車の利用（写真2）、機械にほとんど頼らない農作業、その土地で穫れた作物や家畜の乳・肉などを利用した食事も人々の生活に欠かすことのできないものである。

②マラムレシュ地方の場合

マラムレシュは地形的にも山に囲まれており、みや（2008）、芦原ほか編（2001）によると、「生きた民俗博物館」などと呼ばれる。古い風俗や習慣が村々に色濃く残り、中世からの農村の暮らしを感じることでできる地域として語られる。

飯田・伊東（2006）は、「谷奥のボティザの村に入ると、そこはもう中世そのままの村落共同体。信仰を糧に農林業と牧畜で自給自足の暮らしを営む人々。どの家を訪ねても、牛と羊を飼い、野菜畑を整え、時間があれば織り機に向かうという昔ながらの生活を、ごくあたり前のように目にする。」「教会の行事が行われる日、彼らは民族衣装で精一杯着飾り、仲間と連れ立って表に繰り出す。教会では全身全霊で聖体礼儀に耳を傾け、聖体機密のパンを喜々として拝領する。儀式の後は教会の庭で、持ち寄ったご馳走に舌鼓を打ち、輪になって踊る。あたり前の村暮らしがいかに尊いものか、マラムレシュの山里は教えてくれる。」と述べている。

マラムレシュは木造建築物でも知られるが、この地方の8つの木造教会群は1999年に世界遺産にも指定された（UNESCO World Heritage Centre 2012）。また、サプンツァ（Sapânța）は、故人の生前の特徴を捉え、絵と文章で表現した「陽気な墓」があることで知られる（新免 2000）。この「陽気な墓」も木で造られており、マラムレシュの伝統文化において木が重要であることがうかがえる。

手作りの民族衣装など、伝統的文化は残っているものの、みや（2008）によると、羊と樅の木と共に昔ながらの生活文化を大切にしてきたマラムレシュも、近年は大きく変化し、伝統的な文化が急激に廃れている。このような流れを受けて、貴重な村の暮らしと風習を、それがまだ豊かに息づいているうちに、世界に発信しようという考えから民宿を始めた人もいる（飯田・伊東 2006）。

4. アクセシビリティと個人旅行者の印象

(1) 観光者は何を期待して訪れるのか

観光者は多くの場合、事前にその地で何を見る（体験する）ことができるかを調べ、それを期待して観光地を訪れる。その期待形成に大きな影響を及ぼすものがガイドブックやツアーの募集広告、各種webページ等による情報であろう。したがって、それらの情報源でどのようにクルージ・ナポカ周辺やマラムレシュの魅力が紹介されているかを調べることで観光者が何を期待して訪れるのかある程度推察することができる。

そこで、まず日本の個人旅行者が利用する著名なガイドブック『地球の歩き方』シリーズの『ルーマニア／ブルガリア2011～2012年版』での記述を見てみる。クルージ・ナポカ周辺については、クルージ・ナポカの項において「周辺にはシクSicをはじめとして、ハンガリー人が伝統を守りつつ暮らしている町や村が点在している。クルージ・ナポカを拠点に、ゆっくりとそれらを見て回るのもいいだろう」と書かれている。また、クルージ・ナポカ西方に広がるカロタセグ地方のなかで「とりわけクルージ近郊のナーダシュ川流域（ナーダシュメンテ）の村々は、フォークロアの宝庫として特に有名。歌や踊り、衣装、民芸品、室内装飾、どれをとってもほかになく特徴のあるものばかりで、ブダペストからも熱心なフォークロア愛好者が多く訪れる」とクルージ・ナポカ周辺の村々の魅力を紹介している。マラムレシュについては「民俗学的にも注目される昔ながらの生活と伝統が息づいている」「マラムレシュ奥深くの小さな村の人々は、民族衣装をまとい、農林業と羊を主体とした牧畜による、地域に根付いた生活を今でも続けている。独特の民族舞踊や音楽も興味深い」と紹介している。また、マラムレシュの中心都市シゲット・マルマツィエイについては「町を歩けば、流行のファッションと民族衣装、自動車と馬車が共存する風景に出会う、現代文明と伝統が交錯した地方都市だ」と書かれている。欧米の個人旅行者が多く利用するガイドブック『Lonely planet』のルーマニア版では、クルージ・ナポカではなくクルージ・ナポカから西に約52km離れたフエディン（Huedin）周辺地域としてカロタセグ地方が取り上げられている。そこでは、フォークロアの愛好者に人気があること、ブダペストの民族博物館ではカロタセグ地方に関する展示が7部屋にわたって展示されていること、この地域には何世紀も前からの伝統が残っていることなどが紹介されている。マラムレシュ地方については、中世のヨーロッパ人の暮らしが残っていることや、彫刻で装飾された木造の門や木造の教会などが紹介されている。いずれも『地球の歩き方』とほぼ同様の取り上げ方である。このように、クルージ・ナポカ周辺もマラムレシュ地方も共に民族衣装をはじめとする伝統的生活文化が魅力とされていることがわかる。

次に、パッケージツアーの募集広告の場合について見てみる。日本の代表的な海外旅行検索サイトのAB-ROADで唯一（2011年12月現在）クルージ・ナポカに立ち寄るツアーとして確認できたものがファイブスタークラブ主催のツアーである。そのツアータイトルは「癒しの空間・ルーマニアの辺境☆世界遺産の美しき5つの修道院と☆ルーマニア4都市周遊・1等列車の旅」である。世界遺産の美しき5つの修道院とはブコヴィナ地方の5つの修道院のことである。クルージ

・ナポカ観光は到着日の夕方と翌日の午前という短時間の自由行動のみとなっており、周辺の村を訪れるのは困難な日程である。なお、トランシルヴァニアを訪れるツアーは他にもあるが、その多くはシギショアラ（世界遺産）を訪れるツアーである。マラムレシュを訪問するツアーはクルージ・ナポカよりは多い。同社主催のツアータイトルは「グランド・ルーマニア 3国周遊の旅☆ルーマニア・モルドバ・ウクライナ☆5つの修道院&マラムレシュ地方も訪問」「中世の辺境の村マラムレシュで民泊体験☆美しき5つの修道院&古都シギショアラ☆感動&ふれあい ルーマニア周遊の旅」である。前者はマラムレシュの木造教会群および「陽気な墓」で知られるサブツァを訪問する日程が組まれている。これらのツアーの解説では、「マラムレシュ地方はフォルクローレの里。谷奥に入ると、中世そのままの村落が残っています。」「ボディザ村では民家に1泊、民族衣装を着た素朴で親切な村人たちとの交流が楽しみです。」といった記述がみられる。こういった魅力をアピールする点は他社が行っているツアーでもおおよそ同じである。

最後にWeb上でのルーマニアに関する観光情報の例として、ルーマニア政府観光局の「ルーマニアの観光案内」における記述（2011年12月24日現在）を見ておきたい。ここでは、クルージ・ナポカ周辺やマラムレシュがはっきりと取り上げられているわけではない。しかし、ルーマニアの田舎について紹介する部分では、マラムレシュの写真とともに、「伝統を守り昔ながらの民族衣装を身にまとう民族に出会う事が出来ます。」と紹介されている。その他、「ルーマニアの村々は、近代化の波に洗われずに農民が昔のままの生き方をしているところが多いのです。旅行者のアナタは、タイムスリップしたかのように錯覚するかも知れません。女性はハタ織りで、綿や羊毛の衣装、絨毯、カーペット、テーブルセンターなどを作るのが好きです。また木彫りの職人は、門から楽器にいたるまで、日常生活に必要な家具、樽、食器などを作っています。」「中世の時代へとタイムスリップ」といった記述がみられた。

以上のように、クルージ・ナポカ周辺やマラムレシュ地方については「中世のまま」「素朴」「民族衣装」「伝統的な風俗や社会」といったイメージで語られていることがわかる。したがって、ガイドブックやツアーの紹介等に情報を頼る観光者もおのずとそれらを期待して訪れることになるだろう。なお、クルージ・ナポカ周辺はほとんどパッケージツアーの目的地になっていないが、マラムレシュ地方では行程の一部に伝統的生活文化を対象とした観光を含むパッケージツアーが行われているという違いがみられた。

(2) 観光対象へのアクセシビリティ

いかに素晴らしい伝統文化を有していようとも、観光者のアクセスが困難であれば観光対象として活かすことはできない。観光地として成立するためには観光対象へのアクセシビリティは極めて重要な要素となる。また、先にも述べたが、個人旅行者と団体旅行者にとってのアクセシビリティの違いを調べることで、その観光地がどのようなタイプの観光者を想定しているのかを知ることができる。ただし、パッケージツアーの場合は基本的にアクセス可能な観光対象で構成されるため、調べる必要があるのは個人旅行者の場合である。そこで、ルーマニア北西部における

観光対象となる伝統的生活文化へのアクセシビリティについて、個人旅行者の視点から現地巡検を踏まえて述べていきたい。

①クルージ・ナポカ周辺の場合

クルージ・ナポカ周辺の村々は既に述べた通り伝統的生活文化が魅力とされる地域である。そこで、クルージ・ナポカにあるツーリスト・インフォメーションでどこに行けば伝統的な文化を見ることができるかを尋ねてみた。すると、街中のレストランで伝統的音楽や舞踊のショーが行われている、博物館では伝統文化に関する展示を見ることができる、との返事であった。さらに具体的に、クルージ・ナポカ西方のカロタセグには生きた伝統的生活文化が残るハンガリー系の村々があると聞いたが、どの村に行けばそういった文化に出会えるのか尋ねた。彼は、そういった文化が残っていると聞いたことはあるが場所は知らないし、ここにはその情報も無いという。さらにガイドブックで民族衣装を着た人々の写真とともに紹介されているシクの記事を見せて行き方を尋ねると、バスなどを利用するが日帰りでの往復は極めて困難だという。シクに行こうとする観光客はみんなどうやって行くのかと聞くと、彼はインフォメーションで働いて2年というが、シクへの行き方を尋ねてきたのは今までに日本人が数人いたくらいで、シクに行こうとする観光者はほとんどいないという。

ハンガリー系の村が多いとされるナーダシュ川流域方面の村へは鉄道沿いであれば地図を頼りに比較的容易に行くことができる。しかし、どの村がハンガリー系の村で、伝統的生活文化を見ることができるかについてはガイドブックにも詳しい記述はなく、インフォメーションでも情報を得ることはできない。観光者が期待する文化にアクセスするための情報を得ることは困難である。筆者はクルージ・ナポカ～フェディン間の鉄道沿いの村を3つ訪れたが、すべてルーマニア系の村であった。そこで親切にしてくれた人にハンガリー系の村に残る伝統文化を見に来たがどの村に行けばよいかと尋ねると、「ハンガリー人は嫌いだ」と言って教えてくれなかった。クルージ・ナポカと村を結ぶ電車の本数は少なく、多くの村をまわってハンガリー系の村を探すのは困難である。筆者はナダシェル (Nădășel) からクルージ・ナポカに戻るためにヒッチハイクをしたが、幸運なことに乗せてくれた夫婦の住む村がハンガリー系の村で伝統的生活文化が残って



写真3 装飾部屋 (撮影：宮本)

いるとのことだった。彼らの厚意でその村ヴィシュテア (Viștea) に連れて行ってもらうことができた。そして彼らの家や彼らの紹介により近所の人の家のなかにあるハンガリー系の伝統文化を色濃く残した装飾部屋 (写真3) やビーズを使った刺繍製品の製作現場、家畜の様子などを見学させてもらうことができた。彼らの話では、たまに車で来た観光者の姿を見かけるが室内を見せることはごく稀であり、多くの観光者は家々の外観 (門や壁

などに独特な彫刻が施されている)を眺めて帰るといふ。

このように個人旅行者がクルージ・ナポカ周辺の村々に残る伝統的生活文化を見に行こうとしても、情報の不足、交通の便の悪さにより目的の村に行くことは困難である。仮に伝統文化が残る村に行くことができたとしても、それらが観光者に積極的に開示されているわけではない。したがって、現地に知人でもない限り、個人旅行者が伝統文化にアクセスするには偶然の出会いやその人の厚意といった不確実な要素に頼らざるを得ない。個人旅行者にとってのアクセシビリティは情報面、交通面、文化の開示状況のすべてにおいて良くないのが現状である。もちろん、人類学者やジャーナリスト、現地語に堪能な人および幸運な者などは伝統的生活文化にアクセスできるだろう。しかし、それは一般的な観光者の場合とは異なるものである。

②マラムレシュの場合

マラムレシュは、世界遺産の木造教会群やサブンツァの「陽気な墓」などの名所だけでなく、伝統的生活文化が観光資源と位置付けられていることは既に述べたとおりである。また、持続可能な農村文化観光の試験的なプロジェクトも行われるなど (Turnock 2002)、クルージ・ナポカ周辺に比べると観光に力を入れている地域だといえよう。そして、マラムレシュ観光の拠点となる都市がシゲット・マルマツィエイ (以下「シゲット」という。) である。

シゲットには2011年8月現在、ツーリスト・インフォメーションは無い。『Lonely planet』ルーマニア版では、情報はバイア・マーレ (ルーマニア北西部の主要都市のひとつ) のメイン・ツーリスト・インフォメーションかフレンドリーなCobwobs Hostel (シゲットにあるゲストハウス) の主人に聞くようにと記されている。そこで、Cobwobs Hostelの主人にまず多くの観光者が行くと考えられるサブンツァへの行き方を尋ねた。彼の回答は「ヒッチ」(ヒッチハイク) であった。バスは本数が少ないから難しいという (その日は土曜日)。そして、地図のある場所を指さし、そこで車を捕まえるようにという。サブンツァ方面に行く車は小銭を稼ぐためにその辺りに立ち寄るらしい¹⁾。ただし、車を捕まえる際の地元の慣習はもちろん現地語がわからずに車を捕まえるのは容易ではない。「陽気な墓」に行くと、その周辺には民芸品や民族衣装等を売る土産物店がいくつか連なっており、羊の毛を手作業で紡ぐ女性の姿も見られた (写真4)。また、



写真4 羊毛を紡ぐ女性 (撮影：宮本)

自家用車およびマイクロバスで来ている団体旅行者の姿も見られた。一方、「陽気な墓」から離れた場所では、美しい装飾が施された家屋などの見どころはあるものの観光者の姿はなかった。

翌日、Cobwobs Hostelの主人に民族衣装を着た人々やその他伝統的生活文化を見るにはどこにいけばよいか尋ねた。彼は観光者向けの地図を取り出し、この村はすばらしいゲートが見られる (この地方では各家が装飾を施



写真5 彫刻の施された民家の門（撮影：宮本）

村から村への横の移動は難しいという。実際に村を訪れてみると、素晴らしいゲート（写真5）や民族衣装を着た人々と出会うことはできるものの、村は小さく一か所に長時間滞在するタイプの場所ではない。村から村への交通手段が乏しいことは個人旅行者にとっては辛いものである。

マラムレシュがクルージ・ナポカ周辺の場合と大きく異なるのは、伝統的生活文化の残る村がどこかといった情報は入手できるという点である。Cobwobs Hostelの主人の話だけではなく、地元の観光ガイドマップのようなものも発行されている。つまり、ある程度伝統的生活文化が観光対象として認知されており、それらを期待して観光者が訪れることが想定されているのである。にもかかわらず、マラムレシュは、個人旅行者の観光対象へのアクセシビリティは非常に悪いのが現状である。Cobwobs Hostelの主人が言うには、伝統的生活文化の残る村を訪れる観光者は主にサブンツァや世界遺産の木造教会群を訪れるツアーの一環で立ち寄る者だという。なお、宿泊者にある程度の希望者がいればサブンツァやその他の村々に車で連れて行ったりもするらしい。個人旅行者が自力で周辺の村々を巡るのは困難であり、シゲットまで来たものの村に行かずに戻る者も多いという。一方、貸切バス等での移動であれば、見どころのある村をいくつか訪問することは容易である。途中、団体旅行者を乗せたマイクロバスと2回すれ違ったが、個人旅行者は最後まで見かけなかった。

（3）個人旅行者の印象

筆者自身、個人旅行者としての立場から巡検してきたが、現地で出会った他の個人旅行者にもこの地を訪れてどのように感じたか聞き取りを行った。クルージ・ナポカでは21名の個人旅行者と話すことができた。そのうち、多くの欧米人は長い旅行の途中で立ち寄っただけか、学生の街としてクルージ・ナポカを楽しみに訪れていた（クルージ・ナポカには大学が多く、クラブ等の若者文化が注目されているらしい）。伝統的生活文化に興味を持ってこの地を訪れたという個人旅行者は、21名のうち欧米人（フランス・イタリア）2名、日本人3名（筆者とともに一部の村を訪れた者を除く。）のみであった（文化人類学の調査で来ていた者も2名いたが数に入れていない）。欧米人2名はふたりとも博物館での展示を中心に見に来たといい、時間があれば周辺の

した大きな門を作る伝統がある。)、こちらの村では民族衣装を着た人たちも多いだろう、と同じ方面にある3つの村を勧めてくれた。交通手段を尋ねると、バスは本数が少ないため（その日は特に日曜であり1日2本くらいだという。）やはりヒッチハイクが良いという。勧められた3つの村を一日でまわれるか聞くと、「行って戻って来た者もいるが、思うように移動できるかはわからない」という。各村とシゲットの間は車も捕まえやすいが、

村にも行きたいといていた（ひとりはこちらに住む友人に案内してもらおう予定だという）。そして、現時点で一番印象に残ったのは、たまに街中で高齢者の女性が民族衣装を着ている姿を見ることができたことだという。3名の日本人はそれぞれひとりで旅行しており、そのうち2名は『地球の歩き方』で、もうひとりはインターネット上での情報を見て、周辺の村を巡って伝統的生活文化を見ようと訪れたという。しかし、そのうち2名は、どこの村に行けばいいのか、どうやって行けばいいのかといった情報を得ることができず、結局街中を散策し博物館を見ただけであったという。もうひとりは電車で行ける範囲で村を訪れたものの特に見どころもなくがっかりして帰ってきたという。彼らが共通して語るのは、クルージ・ナポカが予想外に都会であったこと、クルージ・ナポカに来れば周辺の伝統文化の残る村に行くための手段を簡単に見つけられると思っていたこと（ガイドブックに載っていることもあり多くの旅行者がそういった村に行くものと思っていた。）、民族衣装を着ている人がもっといると思った、もっと伝統的な雰囲気を味わえると期待していたのががっかりした、ということだった。さらに、期待する伝統文化を十分に見ることができなかった理由について聞いたところ、ガイドブックが誇張されすぎているのではないか、ガイドブックの情報が古いのではないかと、今はもうそういう文化は残っていないのだから、といった答えが返ってきた。

マラムレシュでは、サプンツァや周辺の村で団体旅行者は見かけたことは前に述べたが、個人旅行者はクルージ・ナポカに比べると非常に少なかった。話を聞いたのはCobwobs Hostelに宿泊していた計4名の欧米人と、他のホテルに滞在していた日本人1名のみであった。そのうち3名は「陽気な墓」を見に来たといい、残りの2名（フランス人カップル）は農家民泊を体験するために来たという。なお、彼らが体験する農家民泊は、農家の伝統的生活文化等を体験するより農業体験を中心に行うものであった。したがって、伝統的生活文化を見に来た個人旅行者の話を聞くことはできなかったが、ガイドブックでクルージ・ナポカ周辺以上に伝統的生活文化が魅力としてアピールされている割にそれを期待して訪れる個人旅行者の少なさを実感することができた。

5. 考察

ルーマニア北西部の伝統的生活文化観光の現状について、本研究の視点から注目すべき問題点は二つある。

一つ目の問題点は、観光対象となる伝統的生活文化に対するアクセシビリティが、団体旅行者の場合は良く公共交通機関で移動する個人旅行者の場合は極めて悪いという点である（主にマラムレシュの場合）。この状態のまま観光化が進んでいけば、観光場面で呈示される伝統的生活文化のオーセンティシティが失われていくことが懸念されるのである。その理由は次の通りである。

マラムレシュはパッケージツアーの目的地にもなり観光者向けの観光マップも発行され、一部の村には英語表記の案内板も見られることから、少なからず観光を意識していることが分かる。にもかかわらず、観光対象へのアクセシビリティが団体旅行者の場合は良く個人旅行者の場合は極めて悪いという状況から、この地域で想定されている観光者が結果として主にツアー形式で専

用のバス等で移動する団体旅行者となっている現状がわかる。したがって、この状態のまま今後さらに観光化が進んでいけば、おのずと団体旅行者の期待に応える形で文化呈示がなされていくようになると考えられる。それが何を意味するのか。ここで、もう一度Cohen（1979）の指摘を確認しておきたい。Cohenは、観光者のタイプを5つに分類し、「気晴らしモード」の旅行者やツアーに参加して観光地を見て回る「レクリエーション・モード」の団体旅行者はオーセンティシティをほとんど求めず、「経験モード」「体験モード」に該当するバックパッカータイプの個人旅行者はオーセンティシティを迫及する度合いが高いというのである。これを踏まえると、団体旅行者を主たる観光者と想定して観光化が進められた場合、そこでの文化呈示が団体観光客を満足させるためにエンターテインメント性を重視したものとなりやすく、オーセンティシティが軽視されがちになると考えられるのである。

もちろん、アクセシビリティが団体旅行者の場合は良く個人旅行者の場合は悪いという状態は、程度の差こそあれ多くの観光地に当てはまるだろう。観光対象へのアクセスの容易さ、確かさはパッケージツアーの大きなメリットである。また、多少のアクセシビリティの悪さは個人旅行者にとってはむしろ冒険的で楽しみの一つかもしれない。しかし、本事例の場合、結局期待した文化に辿り着けずにあきらめることになるほど個人旅行者にとってアクセシビリティが良くないのである。それは、次の二つ目の問題点と重なってより大きな問題になるのである。

二つ目の問題点は、ガイドブック等に記載された魅力ある観光資源が現存していても、観光者自身が見る（体験する）ことができなかつた場合、彼らは「そこにある」文化に自分の旅行技術の問題でアクセスできなかつたと認識するのではなく、「なかつた」と認識する傾向がある点である。ガイドブック等の情報より「実際に行った」という自らの経験が優先され、「今はもうそういった文化は残っていないのだろう」「ガイドブックの情報が古いのではないか」と解釈するのである。もちろんこれは個人旅行者の場合である。パッケージツアーの場合はあらかじめ契約書面に記載されたサービスは提供できることが前提であり、実際に行ってみたら見ることができなかつたという場合は極めて少ないだろう（自然現象の影響を受けやすい観光対象の場合を除く。）。

期待する文化が現に残っているにもかかわらずアクセスできないことは、観光者の旅行技術に一因があることも確かである。しかし、繰り返しになるが「観光」は人類学者やジャーナリストなど特別な者のみが行うわけではない。一般の個人旅行者がアクセスできる状況でなければ、彼らを迎え入れる観光地として成立することは困難である。彼らは、実際に行ってみて期待する文化に出会うことができなければ「なかつた」と認識する。そして、ガイドブック等により期待が形成されているからこそ「がっかり」する。個人旅行者は、宿に置かれた情報ノート（過去の宿泊者が様々な情報を記入したもの）や最近では個人旅行者が自らの体験を書いたブログ、掲示板等の口コミの情報を頼りにする場合も多い。そして、期待した伝統的生活文化を見ることができないという情報が伝われば、個人旅行者はその地を訪れることを敬遠するようになる。一方で団体旅行者にとっては満足できる状況であれば、その地域はいつそう団体旅行者中心の観光地とな

っていく。そうなれば観光地側もさらに団体旅行者に主眼を置いた整備を整えるようになり、団体旅行者を主たる観光者と想定した観光化に拍車がかかることになるだろう。つまり、観光者すべてに対してアクセシビリティが悪いことではなく（それはそれで問題かもしれないが）、団体旅行者には良く個人旅行者には極めて悪いという「差」が顕著であることが問題なのである。観光者が当該観光地の文化に対してオーセンティシティを求めるのであれば、観光地側もオーセンティシティを保った伝統文化を呈示していくことができ、伝統文化の保護と観光の両立につながるといえる。しかし、オーセンティシティを求める個人旅行者ではなくオーセンティシティを求めない団体旅行者を中心とした観光化が進んでいけば、オーセンティシティのある伝統的生活文化の保護と観光の両立がいつそう困難になると考えられるのである。

6. おわりに

以上、ルーマニア北西部における伝統的生活文化観光の現状とその問題点について述べてきた。ただし、ここで問題点として指摘したことは、観光地として経済的に成功することではなく、あくまでオーセンティシティのある伝統的生活文化の保護と観光の両立を目指す立場からの指摘である。何を問題と捉えるかは、観光対象のオーセンティシティに対する考え方、さらには「観光地としての成功」をどのように考えるかによって異なってくるだろう。

ここで、ルーマニア北西部と同じく伝統的生活文化が観光対象となっている隣国ハンガリーの観光地ホッローケーの例を紹介しておきたい。ホッローケーはハンガリー北部にある世界で初めて村としてユネスコにより世界遺産に登録された所である。そこではパローツ人の伝統的生活文化が観光対象となっている。中世そのままの世界を残しているとされ、「生きた博物館村」といわれる村である（ハンガリー政府観光局）。観光ガイドブックでは伝統家屋および民族衣装を着た村人と出会えることが村の魅力として紹介されている（例えば、『地球の歩き方 ハンガリー』）。しかし、私が滞在した約半日の間に会った民族衣装を着た人は2名だけであり、ふたりともバンガローに滞在する観光客であった。村のインフォメーションで話を聞くと、以前は多くの村人が日常的に伝統的な衣装を身にまとっていたが、祝祭日以外で民族衣装を着るのは、今は団体ツアー客が来たときに出迎え、彼らに対して民芸館で伝統舞踊を披露するときくらいだという。また、ここで生活する人はほとんどが年金生活者、あるいは週末の別荘として使っている人たちだという（沖島 2010）。観光客が主に散策する道沿いには、伝統的な建物を利用した観光者向けのレストランや雑貨屋、小さな博物館などが点在し、民家の前ではお土産を売る老人の姿が見られた。こぢんまりとした村の景観はかわいらしく「博物館村」という表現のとおりである。しかし、「生きた」という形容がふさわしいような伝統的生活文化はあまり感じられなかった。この現状を成功といえるだろうか。

ルーマニア北西部はまだまだ観光化が進んでいるというわけではない。クルージ・ナポカ周辺の村々は魅力的な観光資源を有しながらもパッケージツアーの目的地となっておらず、現状では「生きた」という表現がふさわしい貴重な伝統的生活文化も残っている。それはある意味、近代

的な生活から得られる利便性、物質的豊かさが十分ではないということでもある。今後どのような生活を求めていくのか、観光とどのように関わっていくのか、それを決めるのはもちろん地域住民の意志である。既にマラムレシュでは農村の魅力を活かした観光振興を行い、地域の発展につなげていこうとする具体的な研究もはじまっている（例えば、Hontuş 2011）。また、トランシルヴァニアの村のなかでは地域活性化に向けた新しい動きも始まりつつある²⁾。魅力ある生きた伝統的生活文化が残っているからこそ、それを活かした観光振興は地域活性化への貢献が期待されるものである。経済的成功を第一に求めるならば、団体旅行の誘致を中心とした観光開発が近道かもしれない。しかし本稿で考察したように、主たる観光者として団体旅行者を想定した観光開発は、伝統的生活文化の形骸化、オーセンティシティの喪失につながる要因となるのである。それは将来、その地域が持つ観光者を惹きつける魅力を減少させることにもつながるだろう。ルーマニア北西部は伝統的生活文化の残る魅力的な地域であるからこそ、その魅力を維持しつつ地域の人々の幸せにつながるような今後の取り組みに期待したい。

(注)

- 1) 交通の便の悪いこの地域では、地元の人もヒッチハイク（地元ではオートストップという）に頼っており、バス代と同程度の金で乗せてもらえるという（蔵前 2008）。これは、「公共共通機関の不足を補うために社会主義時代にヒッチハイクが国家によって推奨され、それが国民のあいだに定着したといわれている」（同）ものであり、いわゆる違法の白タクというイメージのものではない。
- 2) 一例をあげると、トランシルヴァニアのジェルジョー地域の村々は、地域振興に向けてハンガリーのブダペストにジェルジョー地域代表事務所（Gyergyószék Képviseleti Iroda）を2011年9月に開設している。筆者が訪れたのはその直後であったため具体的な取り組みはまだまだこれからということであったが、学生の交流や共同プロジェクト、文化・経済的交流の発展とともに観光情報の提供を行っていくとのことであった。

引用・参考文献

- 芦原伸・角川善三・松井陽子・廣野栄二・金川功編，2001，『東欧の郷愁—コンプリートガイドブック』新潮社。
- Boorstin, D.J., 1962, *The Image: or, What Happened to the American Dream*. Atheneum Publisher. (=1974, 後藤和彦・星野郁美訳『幻影の時代：マスコミが製造する事実』東京創元社)
- Bruner, E. M., 2005, *CULTURE ON TOUR: Ethnographies of Travel*: The University of Chicago press. (=2007, 安村克己・遠藤英明ほか訳『観光と文化 旅の民族誌』学文社)
- 地球の歩き方編集室，2011，『地球の歩き方A28 ブルガリア／ルーマニア 2011～2012年版』ダイヤモンド・ビッグ社。
- 地球の歩き方編集室，2011，『地球の歩き方A27 ハンガリー 2011～2012年版』ダイヤモンド・ビッグ社。
- Cohen, E., 1979, A Phenomenology of Tourist Experiences, *Sociology*, 13(2), pp.179-201. (=1998, 遠藤英樹訳「観光経験の現象学」『奈良県立大学研究季報』9(1), pp.39-58)
- 遠藤英樹，2002，「観光社会学の新たな地平をもとめて—観光のオーセンティシティをめぐる社会学理論の展開—」『奈良県立大学研究季報』12(3・4), pp.29-37.
- Greenwood, D.J., [1977]1989, Culture by the pound: an anthropological perspective on tourism as cultural commoditization, Smith, V. L. ed., *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*, 2nd ed.: The

- University of Pennsylvania Press. (=1991, 三村浩史監訳『観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応』勁草書房, pp.235-256)
- 萩原直, 1993, 「VI ルーマニアの民族と文化」南塚信吾編『東欧の民族と文化(第3版)』彩流社.
- 橋本和也, 2007, 『観光人類学の戦略—文化の売り方、売られ方』世界思想社.
- Hobsbawm, E. & Ranger, T., 1983, *The Invention of Tradition*. Press of the University of Cambridge. (=1992, 前川啓治ほか訳『創られた伝統』紀伊國屋書店)
- Hontuş, A. C., 2011, INTEGRATED TOURISM CONCEPT - A CONTRIBUTION TO REGIONAL DEVELOPMENT IN THE COUNTRY MARAMURESULUI, *Lucrări științifice. Seria agronomie*, 54, pp. 230-233.
- ハンガリー政府観光局, 2011, 「ホッローケー古村落」(2011年12月24日現在, <http://www.hungarytabi.jp/sekaiisan/isan001.htm>)
- 飯田辰彦・伊東ひさし, 2006, 『ルーマニア—伝説と素朴な民衆文化と出会う』日経BP企画.
- 加賀美雅弘, 2003, 「ヨーロッパにおけるエスニック集団の文化についての覚書き」『学芸地理』58, pp. 11-22.
- Kósa, L., 1977, Erdély, Ortutay Gyula ed., *Magyar néprajzi lexikon*: Akadémiai kiadó, pp.705-706.
- 小谷 明, 2011, 「マラムレシュの木造教会をめぐる」『季刊民族学』35(2), pp.81-104.
- 蔵前仁一, 2008, 「ルーマニア田舎紀行」『旅行人』159, pp.8-65.
- MacCannell, D., [1976]1999, *The Tourists: A New Theory of the Leisure Class*: University of California Press.
- みやこうせい, 2008, 『羊と樅の木の歌—ルーマニア農牧民の生活誌』未知谷.
- みやこうせい, 2010, 「諸民族が錯綜して織りなす歴史の地—トランシルヴァニア—」柴宜弘編著『バルカンを知るための65章(第3刷)』明石書店.
- 中村純子, 2009, 「観光文化研究におけるオーセンティシティ論—内外先行研究の差異と「まなざし」の階層性—」『横浜商大論集』43(1), pp. 121-161.
- 大橋健一, 1998, 「エスニック・ツーリズム」前田勇編『現代観光学キーワード事典』学文社, p.91.
- 沖島博美, 2007, 『ハンガリー “千年王国” への旅』日経BP企画.
- 太田好信, 1993, 「文化の客体化—観光をとおした文化とアイデンティティの創造—」『民族学研究』57(4), pp. 383-410.
- Pettersen. L. & Baker. M., 2010, *Lonely Planet Romania*, 5th ed.: Lonely Planet.
- ルーマニア政府観光局, 2011, 「ルーマニアの観光案内」(2011年12月24日現在, <http://www.romaniatabi.jp/tourism/index.html>)
- 新免光比呂, 2000, 『Hart Collection Vol. 2 祈りと祝祭の国 ルーマニアの宗教文化』淡交社.
- 曾士才, 1998, 「中国のエスニック・ツーリズム—少数民族の若者たちと民族文化」『中国21』3, 愛知大学現代中国学会, pp.43-68.
- Turnock, D., 2002, Prospects for sustainable rural cultural tourism in Maramureş, *Romania, Tourism Geographies: An International Journal of Tourism Space, Place and Environment*, 4(1), pp.62-94.
- UNESCO World Heritage Centre, 2012, Wooden Churches of Maramureş, (Retrieved March 6, 2012, <http://whc.unesco.org/en/list/904/>)
- World Tourism Organization, 2004, *Indicators of Sustainable Development for Tourism Destinations: a Guidebook*: World Tourism Organization Publications.
- 山下晋司, 2000, 『パリ—観光人類学のレッスン』東京大学出版会.

* 本稿は、宮本佳範が1. 2. 4. 5. 6. を、大塚奈美が3. を執筆した。

受理日 平成23年3月9日